

「たいせつ (大切)」考

—『天草版伊曾保物語』の用例をめぐって—

漆 崎 正 人

1 はじめに

キリシタン資料における「たいせつ (大切)」(「ごたいせつ (御大切)」を含む、以下同) は、室町末期以前の日本側の文献にも認められる意味でもって用いられる場合のほかに、〈キリスト教的愛〉の意味で多く用いられていると指摘されている^{#1}。一方、「あい (愛)」(及び「あい」を構成要素とする合成語、以下同) は、対等や尊上の用語ではなく、内容的にも倫理的宗教的観念が乏しかったために、あるいは、肉体的快楽的な愛のニュアンスが強かったために、〈キリスト教的愛〉の訳語として採用されなかったとされる^{#2}。

キリシタン資料における、「たいせつ」の意味のありようがおおよそそのように示されているとしても、個々の文献における使用例の語義の認定や用法の分布などについては、検討が残っている。ここでは、『天草版伊曾保物語』(1593年)に見られる「たいせつ」を取り上げ、その用法を考察することにする。

2 『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」の用例

『天草版伊曾保物語』に存する「たいせつ」の用例は、実は、「エソポの生涯の事」中の“エソポが御馳走を犬にやる”小話に集中している。そこで、その小話の部分を、原文はローマ字であるが、「たいせつ」以外の表現を適宜漢字仮名交りに直し、句読点、鉤括弧等を補いながら引用してみよう。

ある時シャントを知音の許へ請待したに、その座でシャント妻のことを思ひ出だし、エソポを呼び寄せ、座敷にあった珍物を取り揃

へて、「これはいづれも賞翫の物ぢゃ程に、持って行て、我が秘蔵 taixet にするものに食させい」と言はるれば、エソポこれを聞き、女房のことを言はるるとは分別したれども、彼の人エソポに当りざまが悪うて卑めらるるによって、「どこでがな返報をせう」と思ひ居る時分であつたによって、「折に幸ひぢゃ。今この時返報をせいではいづれの時日を待たうぞ」と思ひ、空惚けして彼の雑餉を持ってシャントの家に帰り、シャントのいかにも秘蔵せらるる小犬があつたを、女中の前に呼び出し、かの雑餉をその犬に膳へて（食はせば、ただも食はせいかし）「いかにもよう聞け。汝をシャントの深う taixet に思はせらるることは、双ぶ方がないぞ。その証拠はこれぞ」と言うて食はせ、馳せ帰り、シャントに向かうて「仰せの如くに仕った」と返事をしたところで、シャント言はるるは、「さてそれを受け取つてから、何ともそれは言はなんだか」と問はるれば、「何をも申すことはござなかつたれども、心のうちには一段と深い御 taixet の程を喜ぶ体が見えてござつた」と申した。さてそのあとに女中この事をつくづくと案じて、嫉みの心が起り、「さても曲もない我がつまかな。犬にも我を思ひ換へらるるかな。彼の珍物をば我にこそ贈られうことが本義ぢゃに、さは無うて何ぞよ今の犬にくれやうは？ このやうな人を今はつまと頼うでも何にせうぞ？ とつて退いて、この恨みを思ひ知らせうずるものを」と思ふ心が付いた。さうあるところへ、シャント帰宅して女房に向かうて、例の如く言葉を掛けらるれども、曾て女房は返事にも及ばず、つくすんで居たが、腹こそ立つつらう、「いかにシャントお聞きあれ。そなたと我とは縁こそ尽きつらう。今よりしては夫とも頼みまらすまい。また妻とも思はせらるるな。我に当る財宝をば暇として賜うれ。我が代りには先に雑餉を贈りあつた犬から、寵愛せられさせられい」と言ふによって、その時シャントこの事を聞いて肝を消し、「これは何事ぞ？ さても心得ぬ事かな！ これは定めて例のエソポが仕態によつてかくの如くぢゃ」と思ひ、女中に言はるるは、「いかに妻、ただし御身も我も酔狂か？ 夢とも現とも覚えぬものかな！ 先の雑餉をばそなたにこそ贈つたれ、別には誰にもやらぬものを」と言はるれども、女房衆はこれを真に受けいで、「それは今こそ、さ仰せら

るるとも、一円その分ではなかった。ただ犬にこそ」と言ふによって、エソポを呼び寄せ、「先の贈り物をば誰に与へたぞ」と問はるれば、エソポ居直り申すは、「それは、こなたの御 taixet に思はせらるるものに渡いてござる」と答へ、犬を呼うで、「これこそ御身を taixet に思ふものなれ。なぜにと言ふに、女は夫を taixet に思ふといへども、真実ではござない。それによって少しも気逆ひの事があれば、口答をし、腹を立て、身の炎を燃いて誹り廻って、なほ足んぬせねば、とって退いて、そちはそち、こちはこちと振舞ふものぢゃ。さりながら、犬は打つても叩いても口答もせず、誹らず、とって退くこともござらず、臆て立ち直れば、尾を振り、足許に来て舐りつき、嚙りつきして主人の気を取るものでござる程に、taixet のものと仰せらるるは、平生御秘蔵なさるるこの犬の事でござらうずると存じて、先の物を渡いたは、某が僻事でござるか？ そのうへ、上様へ遣はさるるならば、明かに上様へと仰せられいで、ただ我が taixet に思ふものと仰せられたによって、かくの如く仕った」と申した。その時シャント妻に向かうて、「さればこそ、お聞きあれ。我が誤りではなかったは。ただ使ひをしたものの聞き違へであつた。また聞き違へなれば、折檻するにも及ばぬ事ぢゃ。とかく理を曲げて堪忍めされい」と言へども、少しも承引せいで、けんもほろろに言ひ放いて、親類の許へ行って退けた。そこでエソポ、シャントに言ふは、「ようこそ先は申したれ。御覧ぜられい。犬は棄てまじいけれども、上様は棄てさせられて、この分にござる」と言うたれども〔以下略〕したがって、『天草版伊曾保物語』では、「たいせつ」は、①「我が秘蔵たいせつにするものに食させい」、②「汝をシャントの深うたいせつに思はせらるることは、双ぶ方がないぞ」、③「心のうちには一段と深い御たいせつの程を喜ぶ体が見えてござつた」、④「こなたの御たいせつに思はせらるるものに渡いてござる」、⑤「これこそ御身をたいせつに思ふものなれ」、⑥「女は夫をたいせつに思ふといへども、真実ではござない」、⑦「たいせつのもものと仰せらるるは、平生御秘蔵なさるるこの犬の事でござらうずると存じて」、⑧「ただ我がたいせつに思ふものと仰せられたによって、かくの如く仕った」、の計 8 例存するわけである。

3 主な先行研究の見解

『天草版伊曾保物語』に見られる「たいせつ」について、最初に注目したのは、新村出氏のようなのである。新村氏は、「愛といふ言葉」³³の中で、宗門をはなれて教外の書ではあるが、やはり宗門の人によつて翻訳されたものに、文禄の天草本『伊曾保物語』がある。そのうち「伊曾保伝」のなかに、伊曾保がシャント夫婦の離間を試みる一章があるがその章には深い御大切の程とか、御身を大切に思ふ者とかさまざまな文句がある。これは夫婦間の愛情や犬馬の愛などをさす場合に大切といふ語を使つたのであつて吉利支丹宗の用語から全然離れてゐる。あいにく国字本の方にはこの一章が除かれてゐる。

日本の近古近世文に於ても大切といふ語を愛の意味に用ゐた例があることと思ふが、私は過日たまたま『毛利家記』のうちに二三の用例を見出した。他は未だしらべないが多々存するにちがひない。『毛利家記』の巻一の或節に天正十八年度頃のこととして

金吾殿（秀秋）ヲ上様（秀吉）別テ御大切ニ思召
ある一節を別に

金吾殿はさながら御実子の如く愛憐深くせられ云々
としてある。即ち御大切と愛憐とを同意味に用ゐてある。また

隆景ヲバ上様別シテ御大切ニ御召御信切ニテ
などともある。されば大切を愛のかほりに用ゐたのは、切支丹教徒が独創ではなく、旧来の一意味を意識的に摘出して適用の範囲を広め新しい臭味をもたせたにすぎないことが推定される。

と述べ、『毛利家記』に存する「たいせつ」の例のように、日本の中世・近世の文献には、〈愛〉の意味で「たいせつ」を用いることがあつて、夫婦間の愛情や犬馬の愛などを指す、③や⑤をはじめとする、『天草版伊曾保物語』に見られる一連の用例（①～⑧）は、それに該当し、キリシタン用語としての意味（〈キリスト教的愛〉）は、日本側の文献の〈愛〉の意味を拡張して特殊化した新用法であると説いた。

小島幸枝氏は、「たいせつ（大切）」（『講座日本語の語彙』第10巻・昭和58年・明治書院）において、キリシタン時代までの日本側の文献では、「(1)非常に切迫していること。重大なこと。」、 「(2)大事に思うこと。

鄭重に扱うこと。」の意味でもっぱら通行していたことを指摘し、

またこの(2)の使い方はキリシタン物にも認められる。すなわち、

○天草本『イソポのファブラス』(1592 刊)

イソポが生涯の物語に「ソレハ此方ノゴ大切ニ思ハセラルル者ニ渡イテゴザルト答へ、犬ヲ呼ウデ、コレコソ御身ヲ大切ニ思フ者ナレ。何故ニト云フニ、女ハ夫ヲ大切ニ思フト云ヘドモ真実デハゴザナイ (423 ページ)

○『サントスの御作業』(1591 刊) 二「聖アレイシヨ伝」御父母ノゴ寵愛、並ビナキ大切ノ御ヒトリ子 (90 ページ)

などの例がある。

と挙げ、『天草版伊曾保物語』の、④、⑤、⑥は、「(3) amor, charidade の訳語」としての意味〈愛(情)〉とは異なる(2)の例と認定している。

次に、『天草版伊曾保物語』の注釈類を見てみよう。

「イソポのハブラス」(『吉利支丹文学集』下・昭和 35 年・朝日新聞社)では、『天草版伊曾保物語』に存する「たいせつ」の用例のうち、③の「御たいせつ」部分に注を付し、「御愛情。」と説いている。①に対してではなく、③を注釈の対象として選んでいることからすれば、①～⑧のうち、③のみを〈愛(情)〉の意味と解していると考えられる。

井上章氏は、『天草版伊曾保物語の研究』(昭和 43 年・風間書房)の「註釈」において、「たいせつ」の例の①を取り上げ、

【大切】「大」は「太」とも。

○是は重代なれども貸してやる程に、随分太切にせい。(狂言・そらうで)

キリシタンは、愛(特に神の)の訳語に「大切」を使う事が多かったので、イソポの本文もそう解してもよい。

○デウスの御大切と御奉公に進む心を忽になすが故に。(ドチリイナ・キリシタン <P 71>) (686 ページ)

と言い、まず、「たいせつ」の漢字表記上の問題に触れ、さらに、意味に言及し、翻訳語としての〈愛〉の意味による解釈も許容しているが、井上氏は、①～⑧の現代語訳には、それぞれ、①「大切」、②「大切」、③「大切(愛情)」、④「大切」、⑤「大切」、⑥「大切」、⑦「大切」、⑧「大切」の表現を使っており、③については〈愛〉との二義を立てているも

のの、それ以外は、今日一般に通行している意味（〈大事〉）の方を採用している。

大塚光信氏は、『キリシタン版エソポ物語』（昭和46年・角川書店）では、「たいせつ」の例の③の「御たいせつ」の箇所に注を付け、

愛。新村出「御大切といふ言葉」（『新村出選集』1）参照。

としているが、『キリシタン版エソポのハブラス私注』（昭和58年・臨川書店）では、①の「たいせつ」のところに注を施し、

「愛」（日葡） 新村出「御大切といふ言葉」（新村出全集11）参照。と、注の位置と内容が変更されている。少なくとも、注のある③、あるいは、①については、〈愛〉の意味と解釈し、その根拠として、新村氏の「御大切といふ言葉」^{註4}、『キリシタン版エソポのハブラス私注』の方は、さらに、『日葡辞書』（1603～4年）の「たいせつ」の項の語義を挙げている。「御大切といふ言葉」には、

文禄慶長時代の吉利支丹文学書を読むと、読者は到るところに、御大切といふ名詞、大切に思ふとか、大切に存ずるとか大切に燃ゆるとかいふ文句に出合ふであらうが、それらはみなアモール、即ち英語のラヴ、仏語のアムールに当る語の訳語である。

とあり、この段階では、新村氏は、キリシタン資料の「たいせつ」は、押し並べて amor の訳語と解しているようであるから、大塚氏が、新村氏の「愛といふ言葉」の方ではなく、こちらを根拠としたということは、③、あるいは①の「たいせつ」を、翻訳語としての〈愛〉の意味と取っていることになろう。なお、注の位置の付け換えは、大塚氏が、最初は①～⑧のうちの③だけを〈愛〉の意味で解釈し、後に、①～⑧のすべてを〈愛〉の意味に解したということかもしれない。

遠藤潤一氏は、『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究 正編』（昭和58年・風間書房）の「原典的イソポ伝から見た古活字本・天草本両イソポ伝の問題点」において、まず、「エソポが御馳走を犬にやる」小話を要約し、

この第⑨話は、学者たちの宴会に出席したシャントがその御馳走を妻のもとに届けるようにイソポに持たせたところ、シャントが「妻に」と直接的に言わずに「我が最も愛する者に」⁽¹⁾と言ったため、イソポはその表現を利用し、その御馳走をいつも自分をいじめる女主

人へではなく、主人に忠実な「飼い犬」に与えたという話である。

(245 ページ)

と紹介し、①の「我が秘蔵たいせつにするものに」に対して、「我が最も愛する者に」と訳している。注(1)では、

- (1) 天草本では次のようになっている。「——『これはいづれも賞翫の物ぢやに、持って行て、わが秘蔵大切にする者に食させい』と言われれば、——。」しかし、Daly の「The life」では、「—— Xanthus said, “Then take them to her who loves me.”」の筆者下線部のように、「我を愛する彼女に」となっている。Caxton 集の場合も同様。「比較本文編」参照。(253 ページ)

と、①の「たいせつにする」と、『天草版伊曾保物語』（上巻）が依拠したとする「古活字本祖本」の原典に近いと思しい『デイリー』や『カクストン集』の対応部分のヨーロッパ語とは、主客が逆になっていることを指摘している。さらに、「比較本文編」の [39] では、①の「我が秘蔵たいせつにするものに食させい」とそれに対応する『カクストン集』の「this to her that loueth me best.」とに下線を引き、注(2)として、

- 注(2) 筆者下線部に注意。Daly 参照、「Xanthus, said, “Then take them to her who loves me.”」。天草本では「わたし（シャント）が愛している者に」であるが、Caxton 集および Daly の場合はともに「わたし（シャント）を愛している者に」となっている。後者でないと話に矛盾が生ずる。(508 ページ)

と述べ、①の「たいせつにする」と、『カクストン集』の loueth や『デイリー』の loves とが同じ〈愛している〉の意味であることを前提としたうえで、主客が逆になっている点を問題にしている。なお、④、⑧についても、注を付し、それぞれ、[39]の注(2)を参照するように指示しているので、これらの「たいせつ」も、同様の問題はあるものの、翻訳語としての〈愛〉の意味と解していることになる。

その他、主な国語辞典や古語辞典においては、まず、『日本国語大辞典』第12巻（初版、昭和49年・小学館）では、「たいせつ（大切）」の項の第4義の「心をくばってていねいに取り扱うこと。大事にすること。かけがえのないものとして心から愛すること。また、そのさま。」の例として、①が引かれ、第4義とは区別してさらに、第5義「愛。愛情。」が立

てられ、こちらは、『日葡辞書』の「たいせつ」の項が引かれている。同第2版第8巻（平成13年）でも、ほぼ同様であるが、第5義が、「愛。愛情。特に、キリスト教でいう、他者への無限の愛。」となり、キリスト教との関わりの言及が加わり、その視点からであろうが、キリシタン資料の『バレット写本』（1591年）や『コンテムツスムンヂ』（1596年）の例が増補されている。

次に、『岩波古語辞典 補訂版』（平成2年・岩波書店）では、「たいせつ（大切）」の項の第3義の「深く愛すること。」の例として、①だけが引かれており、それとは別に、第4義「キリストの愛。」があり、その例には、『バレット写本』のものが唯一挙げられている。

『角川古語大辞典』第4巻（平成4年・角川書店）の「たいせつ（大切）」の項には、名詞・形容動詞としての第2義の「深い愛情を注いで大事にすべき人や物。かけがえのないものとして、十分に心を配って扱うべき対象。また、そのような対象であるさま。」の例として、⑥が引かれ、それとは区別して、名詞としての第2義「愛情。愛（あい）。特に、キリスト教でいう自己犠牲的な愛情をいう。『我等に対せられて御大切たいせつのふかくはなはだしき程を（どちりなきりしたん・六）』『貴きおん乳房を含め参らせられて、いろいろにご *taixet* のおん事をつくし給はん事（ロザリオの経・三）』のように、キリシタン教義書では御（ご）を冠して神の愛や神のような慈愛の意に用いることが多い。」があり、その用例として、『バレット写本』、『どちりなきりしたん』（1600年）のキリシタン資料以外に、古活字本の『伊曾保物語』（1639年頃）から、「大切をつくすといふとも、つねに馴れたる人の事なり」の引例がある。名詞・形容動詞としての第2義には、⑥のほかに、『日高川入相花』（1759年）の「太切たいせつな宮様切て仕廻ふたといふて置イて、やっぱりお館だかかに置きまして」が引かれているが、いずれにせよ、この第2義は、「たいせつなもの（なり）」（「たいせつなもの（なり）」）、「たいせつなひと（なり）」（「たいせつなひと（なり）」）などに対する積義であって、「たいせつ」の積義としては明らかに適当ではないが、〈大事にする〉の意味と〈愛する〉の意味とを「たいせつ」の語義の次元では区別しない立場に立っていると言うことはできる。また、名詞としての第2義に、キリシタン資料のほかに、仮名草子の『伊曾保物語』の例を挙げているということは、この語義は、

近世初期の日本側の文献にも存するとする見解を取っていることになる。

以上、見てきたように、先行研究では、『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」の用例について、おおむね、〈大事（にすること）〉という意味と解する立場、〈大事（にすること）〉という意味と〈愛（すること）〉という意味とを含む語義に相当すると解する立場、非翻訳語としての〈愛（すること）〉という意味と解する立場、翻訳語としての〈愛（すること）〉という意味と解する立場に分かれる。このように、種々の見解が存するのには、キリシタン資料特有の用法と見られる〈キリスト教的愛〉の意味自体が、そもそも、「たいせつ」の在来の語義を拡張したものであって、〈大事（にすること）〉という意味との間に、派生義としての連絡があることや、『天草版伊曾保物語』は、キリシタン資料とはいえ、宗教色が濃くなく、そういう点では、日本側の文献にも近いということによって、はっきりした根拠が見出しにくく、かえって意味の判断が難しいということも関わっている。

4 『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」の吟味

「3」で見てきた先行研究の中で、『天草版伊曾保物語』に存する「たいせつ」の意味の特定にあたって、使用例の内容に踏み込み、根拠にそれなりの具体性が認められるのは、「愛といふ言葉」における新村出氏の見解と、遠藤潤一氏の解釈である。この両者の分析の検討を糸口に、考察を進めることにする。

まず、遠藤潤一氏は、①、④、⑧の「たいせつ」を、「古活字本祖本」の原典に近いと見做している『デイリー』や『カクストン集』の対応部分のヨーロッパ語に〈愛する〉（〈愛している〉）を意味する語が使われていることによって、〈愛〉の意味と取っているわけであるが、①、④、⑧の場合ですら、主客が逆になっているという違いがある。②、③、⑤、⑥、⑦の「たいせつ」については、対応する表現が摘出しにくく、本文が必ずしもパラレルの関係にあるとは言い難いので、簡単に結びつけることができないのである。遠藤氏自身が、“エソポが御馳走を犬にやる”小話について、

すなわち、Caxton 集の本文と比較しただけでも、天草本の訳文は

原典の内容がいかに消化され、緩急自在に表現されているかということがわかるのである。この日本語文を逆にヨーロッパ語に訳出したら、その結果は原典の文章とはかなり異なった内容のものとなるだろう。このように、天草本編者が独自の立場で訳出した第⑨話は文学的評価に耐えうる作品となっている。（前掲書・252ページ）と述べ、この小話に関しては、『カクストン集』等と『天草版伊曾保物語』との表現の著しい相違を認め、後者は原典を逐語的に忠実に翻訳しているのではなく、比較的自由的な訳をしていることを指摘している。そもそも、この小話と、それに続く“夫婦仲直しする”小話との2話は、遠藤氏によれば、「古活字祖本」には存しなかったらしく、そこで、『天草版伊曾保物語』の編者は、

編集に当たって、最初からヨーロッパ語原典（プラヌーデスのイソップ伝）を参照していたと考えてもよいかもしれない。また、それら2話は古活字本祖本に無いのだから、原典から直接日本語訳しなければならなくなる。天草本編者はまず第⑨話をヨーロッパ語原典から日本語訳したのであろう。古活字本祖本という依存すべきものが無いから、その訳出は天草本編者独自のものとなる。

（前掲書・251ページ）

ということであれば、この小話に関しては、むしろ、『カクストン集』等とは別系統の『プラヌーデス』との比較を中心に据えると、また違った面が見えたかもしれない。ちなみに、ラ・フォンテーヌがプラヌーデスのイソップ伝を抄訳したとされる、ラ・フォンテーヌの『寓話』（1668年）においては、この小話は、今野一雄訳『ラ・フォンテーヌ寓話・上』（昭和47年・岩波書店）によれば、

その後しばらくして、哲学者とその細君とのあいだに大げんかが起こった。宴会に出ていた哲学者は、なにかおいしいものを別にとりのけて、イソップに、「これをわがよき友のところへもっていけ」といいつけた。イソップはそれを主人がかわいがっている小さな牝犬にもってってやった。帰ってきたクサントゥスは、自分が届けさせたもののことをたずね、おいしかったかね、ときくことを忘れなかった。細君はそういうことを言われても、なんのことか全然わからなかった。そこでイソップを呼んで事情を説明させることになっ

た。クサントゥスは、機会があればイソップをなぐらせる口実をさがしていたのだが、「わたしに代わってこのごちそうをわがよき友のところへもっていけ」とはっきりいいつけたではないか、とかれに詰問した。するとイソップは、よき友とは奥さんではない。奥さんはちょっとしたことを言っても、離婚するとおどかしている、よき友とは、どんなことも堪えしのび、ぶたれたあとでもまたやってきてじゃれつく牝犬です、と答えた。哲学者はなにも言えなくなったが、細君はひどく怒って、かれのところから出て行ってしまった。

(49 ページ)

とあり、『天草版伊曾保物語』と比べて、大筋は共通していると言ってよいが、登場人物の言動、その動機づけ、思惑などの肉付けのし方や表現の差異が大きい。『天草版伊曾保物語』の「たいせつ」との対応の有無については、①の「我が秘蔵たいせつにするもの」が、『寓話』の「わがよき友」に、⑤の「御身をたいせつに思ふもの」が、『寓話』の「よき友(とは)」に、⑥の「女は夫をたいせつに思ふといへども、真実ではごさない」が、『寓話』の「よき友とは奥さんではない」に、それぞれ対応しているが、②、③、④、⑦、⑧に対応する箇所は見い出せない。『寓話』の日本語訳に合せて、『天草版伊曾保物語』の「たいせつ」を考えるとすれば、〈愛(する)〉よりも、〈大事(にする)〉の方が、意味としては近いのではなかろうか。このように、『天草版伊曾保物語』と、その原典系の文献との比較の線からは、直接の依拠原典との比較でないことや、この小話における『天草版伊曾保物語』の翻訳の柔軟さが推察されることによって、①～⑧の「たいせつ」の意味を特定することが困難であることが明らかになった。けっきょく、現状では、これらの「たいせつ」の意味の特定は、この小話がヨーロッパ文学の翻訳であることを念頭に置きつつも、この小話自体の表現の的確な分析による内部徴証に求めざるを得ないのである。

新村出氏は、③や⑤をはじめとする、①～⑧の「たいせつ」は、夫婦間の愛情や犬馬の愛などを指し、この用法は、中世・近世の日本側の文献にも存するとして、非翻訳語としての〈愛〉の意味と取っているのであるが、まず、①～⑧の「たいせつ」が、どのように現れているのか、見てみよう。

この小話の中で、一番最初に出てくる①は、話し手が、話し手自身のこととして発話しており、そういう点で、唯一最も透明な例である。①では、話し手のシャント（学者）の、「我が秘蔵^{ひさう}たいせつにするもの」とは、後に、シャント自身が、シャントの妻（以下「妻」と呼ぶ）を聞き手（「当の相手」^{#5}）として、「先の雑餉をばそなたにこそ贈ったれ」と言明していることによっても、「妻」を指していることが確かである。また、①における、「当の相手」だった聞き手のエソポ（シャントの従僕）の反応について、地の文で、（シャントの）「女房のことを言はるとは分別したれども」とあり、内心の理解では話し手の意図を間違いなく認識したことが語られているので、「秘蔵^{ひさう}たいせつにする」は、その心的行為の主体をシャント、客体を「妻」として通常に表出された表現であると言える。①の場合、話し手は、聞き手が正確に理解することを確信して発話し、聞き手も、心的行為の主体と客体とをそのように内心では理解しているのだから、「秘蔵^{ひさう}たいせつにする」は、この作品内の言語規範においては、夫が心的行為の主体のときに、妻がその客体という関係のもとに表出されることが、ごく自然な表現だったわけである。

ところで、①は、その後、発話者本人だったシャントを聞き手として、聞き手だったエソポが入れ換わって話し手となり、⑦「たいせつのもの^{ひさう}と仰せらるるは」、⑧「ただ我がたいせつに思ふものと仰せられたによつて」というように、二度引用され、また命令内容が④「こなたの御たいせつに思はせらるるものに渡いてござる」と復唱的に提示されているが、いずれも、「ひさう」もしくはそれに当る表現が表出されていないのに、その点について、シャント自身も、地の文の語り手も全く問題にしていない。ということは、①の「秘蔵^{ひさう}たいせつにする」において、「ひさう」と「たいせつ」とはほぼ同義のためにたまたま「たいせつ」で代表したか、「ひさう」は「たいせつにする」に修飾語的に関わり、内容上の核心は「たいせつ」の方にあつたために、「ひさう」を省いても支障がなく簡潔に引用したかの、いずれかである。『日葡辞書』において、「たいせつ」が、ポルトガル語の Amor（愛する）で訳されていることは、既に度々指摘されている^{#6} ことであるが、「ひさう」の方は、ポルトガル語の Estima（大事）で訳されていて、両語は、異なる概念として扱われている。この「ひさう」は、『サントスの御作業の内抜書』（1591年）の「ことばの和ら

げ」には、Cousa estimada（大事にすること）、『天草版平家物語』・『天草版伊曾保物語』・『天草版金句集』合綴本に対する「バレット注解」（1593年頃）には、oestimar（大事にする）とあり、ポルトガル語による釈義〈大事〉に揺れは認められない。キリシタン資料の辞書や難語句解によれば、「たいせつ」が「ひさう」に包摂される関係として捉えられるような意味の違いによって、両語は、当然明確に区別されていたと考えられる。したがって、④や⑦や⑧で、「ひさう」もしくはそれに当る表現が表出されていないのは、内容上の核心が「たいせつ」の方にあったことに起因しているわけである。ゆえに、「秘蔵たいせつにする」において、夫が心的行為の主体の場合に、妻がその客体として表出されることが極めて自然であるという特徴は、「たいせつにする」の表現の問題として解することができるのである。①の表出において、「(秘蔵)たいせつにする」の客体が「妻」である以上、御馳走の受け取り手は、「妻」になるのだが、エソポは、「妻」が、日頃エソポを見下していじめていることに対する報復として、その御馳走を「妻」にではなく、シャントの「秘蔵せらるる」飼犬の方に与えた。つまり、エソポは、「たいせつにする」の心的行為の客体を、敢えて「空惚けして」（誤解を装い）曲解したのである。すなわち、①は、表出の段階と、理解の段階とで、「たいせつにする」の心的行為の客体が異なるのである。エソポのこの曲解がなにゆえに起こり得たのか。なるほど、シャントが「わがつま」のような、直接的に自分の妻を指す表現を用いなかったことや、「たいせつにするひと」ではなく「たいせつにするもの」というもっと抽象的な語を用いていること、あるいは、この発話では、「たいせつにするもの」が「ひさうするもの」でもあることが、それぞれ一因であるとしても、「ひさう」と「たいせつ」とは意味が区別されているし、「たいせつにする」が、夫が心的行為の主体のときに客体が妻として表出されることが極めて自然な表現である以上、決定的な要因とは認めがたい。「たいせつにする」には、主人に当る人間が心的行為の主体の場合、愛玩動物などを客体として表出することが、④ある程度存していたか、または、⑧例外的に可能となる余地があると判断したかの、いずれかのケースに絞られる。

しかしながら、江戸初期ぐらまでで、愛玩動物を心的行為の客体として表出された「たいせつ」の用例は、実際には見つけるのが容易では

なく、その点で、②の「たいせつ」は希少な例だと言える。②では、話し手のエソポが「妻」（「わきの相手」^{#7}）の前で、シャントの飼い犬（以下「愛犬」と呼ぶ）（「当の相手」）に、「汝をシャントの深うたいせつに思はせらるることは、双ぶ方がないぞ」と話し掛けており、「なんぢ」すなわち聞き手である「愛犬」が、シャントの心的行為の客体として表出された「たいせつ」の例にほかならない。ただし、「愛犬」が御馳走を食べるところを「妻」に見せ付け、②を、地の文の語り手が「食はせば、ただも食はせいかし」と評するような、「妻」への面当てとして聞こえよがしに聞かせるために、エソポが、わざわざ「妻」の前に「愛犬」を呼び出したことからすれば、エソポのこれらの言動は、①についての曲解の動機であった、「妻」への報復の、具体的な現れ以外の何物でもない。つまり、②は、愛玩動物が心的行為の客体として表出された「たいせつ」の例であるとはいえ、①における曲解を前提として、①の曲解と整合するように用意して表出された発話であって、①の曲解の決定的要因としての④の例には相当しない。②の表出の段階においても、①の曲解の問題はなお継続しているのである。むしろ、②の表出を受けて、エソポの企みとは感知していない、「わきの相手」の「妻」がどのように反応したかということからの方が、何らかの手掛かりが得られるかもしれない。

②の発話の際の、エソポの言動に接した「妻」には、「愛犬」に対する「ねたみの心」が起こったことが、最初に地の文で語られている。「ねたみ」は、『日葡辞書』に *Emulação, ou enueja*. (競争心, または嫉妬羨望) とあるように、「妻」は、「愛犬」を、自分と同次元で張り合う存在と認識したわけである。「妻」は、「愛犬」が、夫シャントから贈られた（とされる）御馳走を食するのを目の当りにして、まず「愛犬」に対する反応が現れるのは自然なことと思われるが、その反応はそれ以上展開せず、反応の対象は贈り主シャントの方へ移行する。それは、シャントに対する「うらみ」として、帰宅したシャントにも直接ぶつけられるが^{#8}、「妻」の心中表現において詳述されており、矛先は、専らシャントに向けられていると言ってよい。「妻」の心中表現を整理してまとめると、「『妻』である自分にシャントは御馳走を贈るのが“本義”（本当）なのに、『愛犬』に与えたのは、自分から『愛犬』へ、シャントが“思ひ換へ”（心変わり）したということだ。シャントが、『妻』である自分に対して“曲もないつ

ま”（為すべきことをしない夫）である以上、もはや離婚して、この恨みをシャントに思い知らせてやろう」ということになるので、この件が、離婚を決意するまでに至る程の非常に深刻な事態であると「妻」が受け止めていることがわかる。これらの反応が、エソポの言動に接した直後のものではなく、その後になって、「つくづくと案じて」生じた心境であることを重視しなければならない。というのは、これらの反応は、反射的一時的な過剰な反応ではなくて考え抜いた末の事態を認識した定見であるとともに、「妻」にとって、この件が常識の範囲では簡単に判断できない、飲み込むのに時間を要した結果の反応だったことになるからである。「妻」にとっての、この件のわかりにくさは、シャントが「たいせつに思はせらるる」ものが、本来、「妻」の自分であるはずなのに、そうではなく、「愛犬」であることを聞かされたことである。そのため、「妻」は、今のシャントにとっては、「愛犬」は単なる愛玩動物ではなく、理由は不明ながら、「妻」である自分と対比されうる特別な存在と見立てることによって理解しようとしているのである。つまり、②における、「妻」の理解の段階では、「愛犬」は、愛玩動物であるがゆえにではなく、「妻」と同次元に立つことのできる存在と想定することによって、やっとシャントを心的行為の主体とする「たいせつに思はせらるる」の客体となり得たのである。したがって、②の理解の段階では、むしろ、①の曲解の決定的要因としての⑧の例に相当すると言うことができる。

次に、③の「たいせつ」では、話し手のエソポが、シャントを聞き手（「当の相手」）として、「一段と深い御たいせつの程を喜ぶ体が見えてござった」と報告しており、「ごたいせつ」の表出の段階における、心的行為の主体はシャント、客体は「愛犬」であるが、②の表出の場合と同様に、①の曲解の上に成り立ち、①の曲解と整合するように用意された発話である。一方、理解の段階では、聞き手シャントは、①の発話が正しく理解されていると思っ込んでいるから、「ごたいせつ」の心的行為の客体を「妻」と誤解しているし、エソポもシャントの誤解を察している。

④は、前述したように、①の復唱的な言い換え表現で、話し手エソポが、「妻」（「わきの相手」）の前で、シャント（「当の相手」）に、「こなたの御たいせつに思はせらるるものに渡いてござる」と答えており、④の表出の段階では、「ごたいせつにおもはせらるる」の心的行為の主体が「こ

なた」すなわちシャントで、客体が「愛犬」であるが、この表出の段階もまた、①の曲解の延長上にあつて、それと整合するように用意された発話である。④の理解の段階では、聞き手は、心的行為の客体を、①における、自分の表出の段階の客体と同一の「妻」と当然思っているはずなので、結果的には誤解していることになるが、御馳走が実際に与えられたのが「愛犬」と知らされて、その不一致に困惑していると推察できる。

さて、残りの、⑤、⑥、⑦、⑧の「たいせつ」は、いずれも、話し手エソポが、「妻」（「わきの相手」）、「愛犬」（「わきの相手」）の前で、シャントを聞き手（「当の相手」）として為した一続きの発話（以下「エソポの釈明」と呼ぶ）中に現れる。

まず、⑤「これこそ御身をたいせつに思ふものなれ」において、話し手エソポは、「たいせつにおもふ」の心的行為の主体、客体を、それぞれ、「愛犬」（“これ”）、「シャント」（“御身”）として表出している。これまで考察してきた、①、②、③、④の「たいせつ」における心的行為の主体は、すべてシャントであり、「愛犬」の、その客体としての在り方が検討の対象であったが、⑤では、それらとは、主客が逆になって現れるわけである。前に紹介したように、遠藤潤一氏は、①、④、⑧の「たいせつ」について、原典系の文献の対応部分のヨーロッパ語とは、心的行為の主客が逆になっている点を問題にし、比較に用いた原典系文献の方の主客でなければ、「話に矛盾が生ずる」と述べているが、遠藤氏は、①、④、⑧と、⑤、⑥とにおける、「たいせつ」の心的行為の主客との整合を第一とし、後者本位に、①、④、⑧の方の主客関係が正しくないと判断したわけである。「エソポの釈明」においては、エソポの行動の妥当性が、「たいせつ」の心的行為の主体の在り方をめぐって主張されているので、その限りでは、たしかに、①、④、⑧が、⑤と心的行為の主客が同じであれば、わかりやすくなるとは言えよう。ただし、実際には、①、④、⑧ばかりでなく、②、③、⑦も、すなわち、⑤、⑥以外の「たいせつ」においては、すべて、心的行為の主体の方がシャントであるということは、やはり看過できない。たとえ、仮に、直接の原典においてさえ、①、②、③、④、⑦、⑧の全例で、シャントが心的行為の客体であったとしても、それらは、『天草版伊曾保物語』の段階の単なる誤訳ではなく、意図的な手直しによって生じた意図的な不整合と考えるべきである

う。いずれにせよ、この場合は、表現の実態に即して吟味するのが筋である。

前述したように、江戸初期ごろまでで、愛玩動物を心的行為の客体として表出した「たいせつ」の用例を見つけることは非常に困難であるが、⑤のように、心的行為の主体として表出した「たいせつ」の用例を見出すことも、また同様に極めて難しい。そもそも、「エソポの釈明」の大半が、⑤を正当化するための、エソポの弁明となっているのは、愛玩動物を、「たいせつ」の心的行為の客体として表出するということが、全くの異例だからにほかならないのである。聞き手の意表を衝いた⑤を正当化するためには、シャントを「たいせつにおもふ」の心的行為の主体として、①「妻」は相応しくなく、②「愛犬」こそが当て嵌まることをエソポは証明しなければならないわけである。

⑤の表出を正当化するための理屈付けの手順として、エソポは、まず⑥の表出を提示する。⑥において、エソポは、最初に「女は夫をたいせつに思ふと言へ（ども）」と切り出し、世間では一般に、妻である女性が、「たいせつにおもふ」における心的行為の主体となるときに、夫がその客体となるという認識のもとに表出されることを取り上げるが、そのことが誤りである（「真実ではごさない」）と主張している。つまり、エソポは、妻と夫とが心的行為の主体と客体とを構成するという、世間一般に通用しているところの、「たいせつ」の用法を誤用として真向から否定しているわけである。⑥に続いて、①の証明、②の証明の順で展開しているが、「妻」、シャントが、それぞれ、主体、客体として表出されることが期待されながら、⑥では、実際には、妻、夫が、主体、客体として表出されたために、①及び②については、抽象的な次元での、夫を客体とする場合の妻と、主人を客体とする場合の飼い犬との比較という形式で進められている。それらを要約すると、①妻は夫に対して少しでも不満があれば、何かと反抗し、それでも収まらなければ、夫から離れ、全くの他人として夫とは無関係に行動しようとするものだが、それに対して、②飼い犬の方は、主人から打擲されても、主人に反抗せず（じっとして居て）、主人から離れることもなく、すぐに立ち直り、主人に纏り付いて、気に入られようとするものだ、ということになり、ここでは、妻がいかにかに利己的であるか、飼い犬がいかにかに主人に懐いているかが、力

説されている。

しかしながら、これらの主張は、①、㊦の証明として、適切とはいえない。まず、㉒は、その心的行為の主体が、夫を「たいせつ」に思っていない場合の、その主体の行動を述べたものであれば、一部の妻、すなわち、悪妻の代表的なタイプについて述べているに過ぎなく、明らかに世の妻に総じて該当することではないから、㉒自体が説得性を欠き、⑥における「たいせつ」の用法の誤用説も立証できていない。次に、㉓について、多くの飼い犬に言えることだとしても、㉒では、大部分人間特有の行動において示されているので、㉓は内容的には、㉒とは対照的ではあるものの、主に、犬特有の行動で対比されており、したがって、㉒の正反対というのではない。むしろ、内容的に㉒の正反対となり得るのは、心的行為の主体が良妻の場合なのである。要するに、妻と飼い犬とが、全く同じ規準では比較されていないのである。ゆえに、㉒、㉓は、それぞれ、①、㊦の証明としては、不十分ということになる。

しかも、㉒、㉓に続いて、㉔、㉕を前提として、⑦「たいせつのも」と仰せらるるは、平生御秘蔵なさるるこの犬の事でござらうずると存じて」云々の表出があり、その上、その少し後に、⑧「ただ我がたいせつに思ふものと仰せられたによって、かくの如く仕った」と表出されており、⑦、⑧の「たいせつ」は、ともに、前述したように①の引用であるから、⑤、⑥は、①、②、③、④との間に、心的行為の主客に関して、不整合が存していたゆえに、さらにまた、⑦、⑧との間にも不整合が生じているのである。

㉒、㉓が、それぞれ、①、㊦の証明として、客観的には不十分であり、また、①、②、③、④と、⑤、⑥との間、及び、⑤、⑥と、⑦、⑧との間に不整合が存するにもかかわらず、「当の相手」のシャントは、エソポの弁明を聞いて、「使ひをしたものの聞き違へであった、また聞き違へなれば、折檻するにも及ばぬ事ぢや」と「妻」に言い、エソポの言い分を一応容認し不問に付しているし、「わきの相手」だった「妻」もエソポには反論していない。これらを、どのように解すればよいのか。

まず、㉒についてであるが、けっきょく「妻」は捨てぜりふを残して出て行くし、そのことで、エソポ自身がシャントに、「ようこそ先は申したれ」、「上様は棄てさせられて、この分にござる」と、自分が言った通

りだと述べていることから明らかなように、㉔の内容が、妻一般のことではないけれども、「妻」に当て嵌まることは疑いない。そもそも、㉔は、「たいせつ」における、心的行為の主客が具体的個別的な㉕との関係で言えば、心的行為の主体、客体として、「妻」、シャントが、それぞれ、表出されることが期待されていたのであった。とすれば、㉔は、本来、「妻」が「たいせつ」の心的行為の主体として述べられるべき内容であったものの、この場合、主人の妻を露骨に直接非難することになるし、しかも、その場に「妻」本人が居合わせていたこともあって、主体を妻と一般化抽象化して婉曲に表出し、そして、聞き手シャントらも、話し手の意図を汲み取って理解することができたからこそ、㉔が問題にされなかったと考えられる。つまり、㉔をめぐっては、「妻」を妻（“女”）に置き換えて表出し、妻（“女”）を「妻」に置き換えて理解することが行われたのである。㉕についても、同様に、内容的に「愛犬」に当て嵌まると推察される。こちらは、㉔と連動して、一般化抽象化されたのである。㉔によって、「妻」が、シャントを「たいせつ」に思っていないことがそれなりに示されたことになったため、消去法の結果、いわば選択肢として残った「愛犬」に関する㉕が、㉔とは内容的に対照的であることを正反対であることに拡大解釈されて、㉔の証明として便宜的消極的ながら受け入れられたと解される。それゆえに、㉕における、「たいせつ」の用法は、非常に特殊な例外的な用法ということになる。

また、「たいせつ」における、主客の入れ換えによる不整合に対して、論理の擦り換えとして問題にしていないことが、こうした不整合に、話し手も聞き手も違和感を持たずに受け入れているからだとすれば、「たいせつ」においては、心的行為の主体と客体との間で互換された表現同士が、同時に成り立つことが極めて自然なことばだったということになる。つまり、「たいせつ」には、心的行為の主体と客体とが互換関係にある〈相互性〉が、意味特徴になっていると考えられる。

5 おわりに

以上、『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」の用例、すなわち、「エソポが御馳走を犬にやる」小話にのみ集中的に存する用例をめぐって

考察してきたが、それらの例は、表層的には、夫婦間における心的行為を表わす場合や、主人と飼い犬との間における心的行為を表わす場合に現れているけれども、前者の用例と、後者の用例とは、等し並みに扱うべきではないことが明らかになった。前者には、非常に透明な用例が存し、また、世間で広く行われている旨の言及もあるので、一般に通用する用法と言えるが、後者の方は、飼い犬を愛玩動物としてではなく、夫にとっての妻と同次元に立って妻と対比され得る存在と見立て、主人と飼い犬との関係を、夫と妻との関係に擬することによって、ようやく用いることが可能になっているという、極めて特異な、例外中の例外なのである。つまり、後者の場合は、主人と飼い犬との関係を夫婦関係に準じて捉えているわけであり、したがって、この小話における「たいせつ」は、基本的には夫婦間における心的行為を表わす表現として用いられていると見做すことができる。

このように見てくると、『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」の用法を特定することの厄介さは、『天草版伊曾保物語』自体の資料の性格に由来していること以上に、最初の表出例以外の残りの7例が、その表出をエソポが無理に曲解したことが引き金となって、連鎖して現れていることに基づいていることがわかる。この小話における「たいせつ」の全8例中、初出例以外の例は、引用のものもあるけれども、すべてエソポの発話中に現れて、自分がした「たいせつ」の曲解を正当化するために、繰り返し用いられているのである。言い換えれば、この小話は、夫婦間における「たいせつ」が、テーマとなっていると見ることができる。そして、その核心は、「たいせつ」の4例が集中する「エソポの釈明」の中の④によって、夫を「たいせつ」に思っていない妻の行動を述べることによって、裏返しに示されているのである。すなわち、それは、配偶者が相互に相手に対して、寛容と忍耐と思いやりの心を持って、協力し、連れ添っている、という在り方として現れるものであると読み解くことができる。これは、まさしく、ヨーロッパ的な、対等な立場に立って相手の人格を互いに尊重する、夫婦の間における〈愛〉の在り方にほかならないのである。ゆえに、『天草版伊曾保物語』における「たいせつ」は、翻訳語としての〈愛〉の意味で用いられていることになるのである。

キリシタン資料の『どちりなきりしたん』（1600年）には、婚姻の秘跡

に言及があり、婚姻の目的や夫婦の在り方が、例えば、

まうりもうによの縁^{ゑん}をむすぶ時御あるじがよりあたへくださるゝ
さからめんとの大なるがらさをもてふうふたがひに大切ふかきむ
すびをなし、そひとゞくる事たやすき者也（中略）ふうふたがひに
一身のごとく思ひあひ、ようじよあらん時、ちからをそへあはんが
ため也、此ぎをたつせんためにはかりそめにてはかなはざる儀なれ
ば、ながくちぎらずんばあるべからず（以下略）（50 オ～ウ）（読点
は、私に付した）

などと拾え、「エソポの釈明」で間接的に示されている夫婦の在り方と響き合うものであることがわかる。“エソポが御馳走を犬にやる”小話は、夫婦間の真の愛を学ぶための反面教師的な教訓話として、説教で語られることもあったのではなかろうか。

[注]

- 注1 新村出「愛といふ言葉」（『大谷大学新聞』昭和2年1月25日）、小島幸枝「たいせつ（大切）」（『講座日本語の語彙』第10巻・昭和58年・明治書院）など。
- 注2 注1論文に同じ。
- 注3 注1の新村出論文。
- 注4 『大阪時事新報』・昭和2年1月10日。
- 注5 話し手が、「自分の話の内容を伝えようとする当面の相手」のこと。（永野賢『伝達論にもとづく日本語文法の研究』・昭和45年・東京堂出版・64ページ）。
- 注6 注1論文に同じ。
- 注7 話し手の「『自分』の意識に反映した聞き手（『相手』）」のうち、「第三者的なもの」（注5同書・87ページ）。
- 注8 対話拒否に始まり、離婚と財産分与の要求、そして、「妻」の代わりに、「愛犬」から“寵愛せられさせられい”（かわいがられにおなりなさい）と、心的行為の主体と客体との間の上下の識別が明確な表現を用いて、シャントを「愛犬」の下位に置き、痛烈に皮肉っている。